

せたかむい

年表で読む

古平の歴史

《52》

発行・古平町史編纂室
古平町文化会館 842-2590
第145号・平成13年10月1日

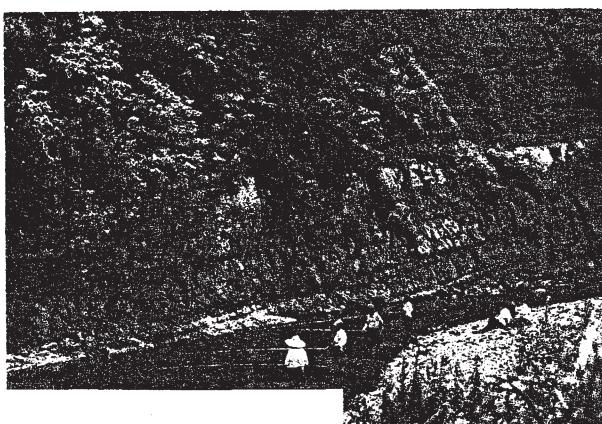
捕獲は九月一日から十月四日まで行っていて、これはアユ漁をする者の利益になることでもあり、捕獲したアユの金額の半額をふ化事業の経費とし、捕獲した者には半額が支払われていました。

アユふ化事業は、五カ年に三千九十七万一千粒がふ化放流され、古平川は繁殖河川として最適と認められました。

アユの漁獲高は正確には分かれないと認められました。

アユの漁獲高は正確には分かれないと認められました。

△ヘ古平川でのアユ釣り風景▽



年 度	漁獲高(尾)	金額(円)
大正八年	一〇〇〇	一〇〇〇
九年	二〇〇	二〇〇
十年	三〇〇	三〇〇
十一年	四〇〇	四〇〇
十二年	九〇〇	九〇〇

この後、古平漁業組合では予算を計上し、大正十五年までふ化事業を継続しています。

依頼臨時雇解ク

中島乙彌
臨時雇

明治三十六年三月三日

古平郡古平町役場

単価

四四四四
四四三三
四五五五

金額

三三三四
一〇六四〇〇
三九四九六五

せたかむい
大正七年ころ、山本忠吉が毛針を使ってアユ釣りを始め、仲間にもそれを教えたりして、それから毛針を使ってのアユ釣りが増えたようです。

氏名
山本忠吉
林重次郎
小平保一郎
計
一〇、七八六尾
採捕尾数
二、四三九〇尾
四四七七尾
八九七七尾
六尾

△大正八年▽

10/11 本の飯店をほごし
た跡に我が家を建てるので、今朝、大工が七人来る、台所は裏の方に引いて物置に使うつもりだ、順調にいけば十八日ごろ建前ができそうだ、今日はイカ大漁、一隻で四千もとったところ敷地が空いた、地ならしをし土台石入れに取り掛かる、イカ漁も五〇〇～六〇〇とれた、夜、雲行きが早く荒れ模様になつてきたようだ、畠のリンゴも落ちたのではないかと心配だ。

10/16 昨夜、積丹岳に雪が降つた、火鉢が欲しくなつてきた、雨模様で家の方はなかなか進まない。

10/17 明日は建前が出来るというので餅つきをする、お供えやら紅白の餅を用意する、三山神社の大川さんに来てもらひ地祭りをする、晴天だったが寒い日であった。

10/18 いよいよ建前の日だ、大工が九人、手伝いの女の

(サ) 本支店なども日下工事中で

10/29 このごろは天気の良い日が続き、家の普請には実際に好都合だ、預けてあつた商品を石倉に運び入れた、家の塗り壁も早く乾いて仕事も順調だ、(ヨ)渡辺、虫、藤川、(中)梅野、

11/14 余市、沖村方面の大謀でブリが大漁、四〇五千尾ずつも獲つたとのこと、カレ網が石倉に運び入れた、家の塗り壁も早く乾いて仕事も順調だ、(中)梅野、寺町方面を巡回する。道路に降つた雪も

人も十四、五人来てくれて、表の手伝い人と合わせて総勢六〇人ほどだ、昼は赤飯と鯨汁、四時ころから、三山神社の大川さんご祈祷をしてもらい建前をする、紅白の餅をまいてめでたく建前の行事も終わつた、ます

ある。

10/19 秋日和で、大工さんが九人で早くから仕事をしている、浜町の一等地に恥ずかしく建前に済んで一安心をした。

11/6 天気快晴で何より

だ、土壁も乾いたので下見板を打ちつけている、(本)では冬物大売り出しというので店の内外を

11/23 新嘗祭(にいなめ

さい)現在の勤労感謝の日)で国旗を立てる、生徒は郷社へ参拝に行く、サバ大漁で十銭で五十尾だ。

消え、道路が非常に悪い、湯内と島泊から舟を廻してカレ網の客が来た、家の普請の方も二階や下の座敷の天井板を張つて、新し道は二回も修繕して、下水溝やら砂利などを敷いている。

10/13 いよいよわが家の敷地が空いた、地ならしをし土台石に入れに取り掛かる、イカ漁も五〇〇～六〇〇とれた、夜、雲行きが早く荒れ模様になつてきたようだ、畠のリンゴも落ちたのではないかと心配だ。

10/16 昨夜、積丹岳に雪が降つた、火鉢が欲しくなつてきた、雨模様で家の方はなかなか進まない。

10/17 明日は建前が出来るというので餅つきをする、お供えやら紅白の餅を用意する、三山神社の大川さんに来てもらひ地祭りをする、晴天だったが寒い日であった。

10/18 いよいよ建前の日だ、大工が九人、手伝いの女の

11/3 小樽からかわら職と島泊から舟を廻してカレ網の客が来た、家の普請の方も二階や下の座敷の天井板を張つて、新し道は二回も修繕して、下水溝やら砂利などを敷いている。

11/13 小樽からかわら職と島泊から舟を廻してカレ網の客が来た、家の普請の方も二階や下の座敷の天井板を張つて、新し道は二回も修繕して、下水溝やら砂利などを敷いている。

高野名幸作さんの日記から

【46】



くない建物が出来たと思う、石倉も出来て、これから仕事に便利になり申し分ない、恵比須神社の宵宮祭で町もすいぶんと賑やかだ。

10/29 このごろは天気の良い日が続き、家の普請には実際に好都合だ、預けてあつた商品を石倉に運び入れた、家の塗り壁も早く乾いて仕事も順調だ、(中)梅野、寺町方面を巡回する。道路に降つた雪も

11/13 小学校の阿波先生が病死した、前途有望、春秋に富む身であつのに實に惜しむべきだ。

12/3 朝起きて見るところの銀世界、三寸ぐらいも積もっている、これは根雪になるかも知れない、沖に汽船が三隻停泊している、家の建築現場へ行って見る、大工は今日で切り揚げるというので一生懸命やつて、家もなかなか立派になつた、座敷にびょうぶを立て、大工さん九人、建具屋五人を招いて酒肴を出してねぎらつた。

12/7 朝から吹雪、(中)大謀が時化で網を流したという、本年は美國方面の大謀が良かつた、出足平の共同大謀は十二万円ほど水揚げがあったという。

(以下次号)

思い出に残る川内旅館



富山市 高橋 藤蔵
(元・稻倉石鉱業所)



に（主人）は、べんぢやらは言わねども、うだでええ人だがら会つてみたらどうだね」という朗報を持ってきたのですが、鉱夫さんが言うには、夏になると寮の若い者が仕事の合間をみては山を下り、昼は海の獲物をあさり、夜はここに泊まつて飲みあかしているのだそうだ。

早速、川内旅館を訪れたのですが、案の定、底抜けに人の良いご主人で、数分の話し合いで即「契約成立」となりました。補助金を除けば僅か一千円位で利用できたので、連日利用者でにぎわい、私もまた、土・日曜日は殆ど川内旅館に入りびたりとなり、潜りを覚え、獲物の捕り方を覚え、すっかり海の魅力に取りつかれたものでした。

職場の行楽にも利用され、予でいた従業員にとって、心の安らぎの場として活用されたのが温泉保養所でした。

私が稻倉石鉱業所に転勤したのが昭和三十七年の春でした。当時の稻倉石は、斜陽化した鉱山を存続させ、往年の華やかさを取り戻そうと苦闘を続けていたのですが、懸命な努力とは裏腹に、一向に明るい兆しが見えないまま、無為に歳月が過ぎ去るばかりでした。

努力が報われない焦りを抱いていた従業員にとって、心の安らぎの場として活用されたのが温泉保養所でした。

保養所は、鐵興社独自の健康保険組合が朝里温泉の八宏園と契約してくれました。

保養組合の補助が大きく、本人と家族の負担額は、所定の半額位の低料金で、疲れを癒し家族サービスも出来ることから大

好評で、更に、親戚のなかつた私のような転勤族には、小樽・札幌への行楽の宿泊基地としてそんな折り

「夏に利用できる『海の家』のようなものが欲しい」という希望が出され、早速、近くて・安くて・料理の美味しい旅館や海の家を回ったのですが、「うん」と言つてくれるところはありませんでした。

夏が稼ぎ場の旅館や海の家に「安い料金」での契約は、喜ばれるはずがありません。

止むなく断念と思っていた矢先に、若い鉱夫さんが「あのせー。海の家なら美國の川内（旅館）がええべよ。あ



定の会費で赤字の時に、主人に相談しますと

「おらあ、お客が喜んで泊まつて貰えいいんだからせー。」

予算がなかつたら酒やビールを全部持ち込みにし、うちで

持ち込みを半分だけで目をつむれば予算で間に合うべさ。

これでどうだね」

と、商売の損得を抜きにしてのサービスをしてくれました。

奥さんもお婆ちゃんも気だての優しい方で、低料金なのに大尽のごとくに振る舞う従業員にも、快く接してもらいました。

こうして、従業員が旅館の好意に甘えて、お礼の気持ちもあって、利用の度に、女のお子さん（「まきこちゃん」）だった婆ちゃんには、み仏様へのお供え物を持参したものでした。

仏さまにお供え物をして下さるお客様には、あなただけです。

と言うお婆ちゃんの福よかな笑顔が今も瞼に焼きつき、折があるは是非お訪ねし、海鮮料理を満喫したい思い出の旅館です。

断章小説【ふるさと遙か】 第27編

セ、ようなら春告魚

吉川義雄

内と、確実に鯵は、その姿を消し続けていた。

昭和の二桁代に入つて、積丹半島以北の人たちは、依然として警告を無視し続けていた。

一獲千金の美酒に酔つたことのある者に、何を言つても耳を貸することはない。

「友野クンよう、いまはいいけ

んどよう、今になんにもいなくなるケン、今のウチにしつかり養つておかんと、大変なことになるぞ」

彼の小学校高等科のころ、水産という特別教科を受け持つた

千葉教師が、噛んで含めるよう

にして、未来の漁業の在り方を教えてくれてはいた。

白帆を風に任せて海原をゆく

川崎舟や保津舟、絵のような点

景の中での生活に、海からの大

量収奪はない。電気着火、焼玉

エンジント、人の欲望は限りな

務所に飛んで来た。

早朝、窮地を脱した親方の一

人が、酒ビンを抱えて、組合事

務所に飛んで来た。

どこで知つたのか、港の中に

ツブ買い船がたちまち群集して

來た。丸山で短い鳴き声でうぐ

いすが鳴いたようだ。

ヘこの稿終わり

遙かな時代の警告は、鯵の来ている限り無視され続けた。

松前・江差・瀬棚・寿都・岩

水源の奥山で樹木を倒せば、海は養分を失い悲鳴をあげる。鉱

「ケラケラでもいいから、今夜つつかけてくれんと、俺アハア終わりだべさ」

漁業組合二階の事務所には、鯵の情報を知ろうと、するようないで、建網の親方たちがやつて来る。

丸山岬から、厚苦岬までの網はもう揚がつてしまつた。当然のよう、前浜に並んでいた数か網は、一足先に見切りをつけて泊り舟の灯りはない。わずかに「山の中」といわれる歌棄から沖村、ローソク岩あたりまで、思いきり悪く、数少ない網がそのまま突つ張つている。三月の声は、もう鯵の来ないことを忠告していた。しかし、この時季でも、古平川と断崖から落下する雪解け水で海の水温が産卵に適したとき、意表をつ

いた群衆のあることも漁師たちは知つていた。

「やアヤ、やアヤ。一晩經てばそれだけゾウヨ（経費）かかるべ。米っこも無くなつたし、番屋の板つこはいで、ストブ燃やしてる始末だや」

悲鳴に似た愚痴を、お互に隠そうともせず、親方たちは声高に話し合つていたが、夜更けと共に、一人減り、二人減りして居なくなつた。

友野の少年のころ、七色に輝く優美な白銀の鯵は、春も雪解けのころ、ツガル（津軽）衆と共に、確実にやつて來た。群衆を疑う者など誰ひとり居なかつた。

「いやアー、いがッたでや。サンパいつぱいとはいがねどもよ、まんざ飲んでけれ」

早朝、窮地を脱した親方の一人が、酒ビンを抱えて、組合事務所に飛んで来た。

どこで知つたのか、港の中に

ツブ買い船がたちまち群集して

來た。丸山で短い鳴き声でうぐいすが鳴いたようだ。

ヘこの稿終わり

山の毒素は海を死なせる。大量の生活廃水は白濁の汚染となつて、子どもたちさえ沿せぬ海となる。

昆布さえ生えぬ、速乾剤を混入したテトラポットは、波を止めても、魚さえ寄りつかない。

白々しい磯焼けの海底は、いつの日、元に戻るのだろうか。

た 立ち昇る古平温泉湯の香り

平成元年、町民の行政へのアンケート調査を行ったことがあつたが、体育館や老人ホーム、医療、下水道設置などと並んで、そのころ各地でブームとなつて、古平温泉への要望が上位を占めていた。

日本の多くの地域は火山帯の中にあって、この積丹半島でも近くの神恵内村には早くから温泉があつたし、どこを掘つても温泉が湧き出てきそうな気がするところではある。

平成七年、町民の要望も高まるなか議会で審議され、地熱水利用ボーリングの探査委託事業が、旧古平高校跡地で進められることになった。

工 期 平成七年六月三〇日

から同一二月二七日

委託料 八千一三七万円

高台からの掘削、だつたが工期を余して見事泉脈を掘り当て、

茶褐色をした熱水が一分間に約一二〇リットルも噴出し、思わず歓声が上がつた。

泉質は検査の結果、ナトリウム塩化物であることが分かり、多くの薬効のあることも確認された。

平成八年八月二七日、ふるびら温泉『一望館』として竣工式と安全祈願祭が行われ、九月一日、待ちに待つたおらが町の温泉がオープンした。

旧高校の校舎を利用した一望館だが、温泉もたっぷりとした湯量と、薬効も自慢の高、低温の二つの浴槽があり、また、二階の休憩室からはその名の通り古平湾と海岸線の景観が眺望できるのもうれしい。

今は家庭ぶろが普及したといえ温泉ともなるとまた別で、オープンから三日間無料開放したこともあり、珍しさもあつて

連日の大盛況であった。

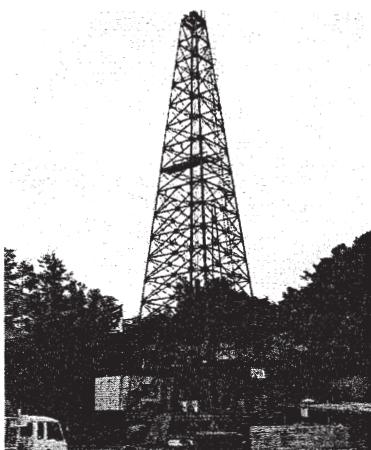
海と山、静かな環境の中で四季折々の変化のある出で湯は、

町民はもちろん、町外からの観光客にも好評で、開業一年目にして、早くも札幌からの親子連れが一〇万人目の利用者として記念品を受けている。

町内にあつた公衆浴場も、新

地方面では玉の湯が早くから廃業し、今まで浜町の朝日湯が廃業を決め、昔懐かしい浴場の雰囲気をわずかに伝えるのは温泉だけになつてしまつた。幸い温泉には週四回、一日三回の送迎バスが運行されることになり、高齢者にとっても憩いの場としていつそう重宝されるだろう。

↔へ温泉のボーリング▽



すぐ側には丸山があり、遠く海の展望が利き、遊歩道も完備しているので、あわせて丸山登山もぜひおすすめしたい。

適 応 症 (浴用)

神経痛・筋肉痛・関節通痛・五十肩・運動まひ・うちみ・くじき・痔疾・疲労回復・冷え症・やけどなど、まさに「万病に効く」薬効が確かめられた。

最上徳内

蝦夷草紙

を読んでみましょう

文字を教える

私は天明六年（一七八六）の夏、蝦夷の島々を巡回することになつたが、蝦夷の中に私一人だけで、通辞がいたがいかがわしく言葉が何かと不自由であつた。

フリウエンと言う若い蝦夷がいたが、多少の日本語が分かるので私の手元において連れ歩いていた。ある時、この蝦夷が文字を学びたいというので片かな字を学びたところ、大分のイロハを教えたところ、大分覚えてから、この文字はどういう意味で、どうすればあらゆる言葉に通じるようになるかと聞くので、わが国の弘法大師という偉いお坊さんが作られたもので、その意味は私もよく知らない。しかし、このイロハ四十八

私は日本の風俗を好んでいるが、

文字を学べば一切の言葉を書き表せない言葉はない」と、それは奇妙なことだという。それからはどうしたのか、学ぶことに精を出さなくなつたので、懲らしめのため叱りつけた。私を師と頼んだからには、お前はわが子同然であり、ぐうだらな子を持つのは親の恥である。蝦夷には文字がないので、お前が文字を覚えれば周りの人から重宝だとうらやましがられ、蝦夷にとつても益のあることである。

その後私は、蝦夷に文字を教えに彼をほめたたえた。

松前に帰ることになり、彼を連れて途中箱館村まで来たときのこと、宿をとつた白鳥新十郎宅で紙に文字を書かせて見せたところ、これはまさに前代未聞のことと白鳥家では驚き、盛んに彼をほめたたえた。

生来の蝦夷であるので覚えることは鈍感があるので、これに免じて今までのことを許して下さいと詫びた。私もこの言葉を聞いて、蝦夷を卑下していたような自分を反省し、このように志を持ちながらふびんな境遇を思い、感涙に堪えなかつた。

彼はついにかなづかいも覚え、強く私を慕うようになりなおふびんさがつのつた。

西蝦夷ソウヤ（宗谷）辺りで、アイヌの人たちの座興に、口に糸をくわえてそれを爪でひき、それに团扇（うちわ）や太鼓のようなものを打ち、囃子（はやし）に合わせて歌う。その歌の意味を訳してみよう。

「蝦夷の国が始めて開けた時、十二一重（じゅうにひとえ）の美しい服を着た神と、ただ一枚

の粗末な服を着た神が天下りした時に、美しい服を着た神を尊敬し、粗服を着た神を尊敬しないに感じ、それからは以前にも増して精を出すようになった。また、その時に彼は言った。

私は日本の風俗を好んでいるが、



小屋から獵に出かける時行き先の方向を示す

歌の文句のこと

【注】文字＝蝦夷には文字がなく、なわを結んだり、木に刻みをつけて記憶の補助とした。ものを数えるにも、それぞれの家で独特の方法があつた。

忘れられない しどき餅

の味

竹内コト

子どものころ「もんび紋日・

かい粉になります。

物日」といつて、節句や彼岸などの年中行事や仏事などがあると、前日から米をといで、それを臼(うす)でつくのです。ふるい(篩)にかけては荒い粉をつき、それを何回も繰り返すと細

なった粉に熱湯をかけてこね、丸めてから白の中で一息つかせます。ふるいに残った荒めの粉はまた別に、適當な形にして油をひいた鍋で焼くか、ゆでたり

返らないようにして、手すりにつかまって一段ずつ確かめながら登つて行きます。

『ぶらり寺の一人旅』室谷忠雄

アイヌの人たちは夷狄(いてき)と言われることを恥思っている。日本に大いに好意を持っているので、教化するならば良民となれる今の時勢である。

身延山久遠寺 日蓮宗という宗派は分派の多い宗派で、総本山は身延山久遠寺ですが、大本山というのが五つもあります。今日は総本山・久遠寺を訪ねたいと思います。

久遠寺山門をくぐり抜けてビックリ、目の前に菩提梯と呼ばれるものすごく急勾配の石段があります。聞くところでは、二百八十七段あるのだそうです。

高所恐怖症の私には、余りありがたくない石段です。後を振り

除夜の鐘の梵鐘があります。石段を登つてグロッキーになっていた私は、本殿に参拝する

として生まれた日蓮は十六歳で出家し、後々『法華經』こそが真の仏教であると確信し、『立正安國論』を著わし、他の宗教

を徹底的に批判してこの本を北

しておやつになります。これらに砂糖しようゆや、時にはちょっと手のこんだゴマ砂糖などをつけて食べますが、当時は何よりのご馳走でした。

母は仕事の忙しいのもいとわず、こうしたおやつを手際よく作ってくれたものでした。

また、節句の時のべこ餅は黒砂糖を入れてこねるので、特別の味わいがありました。ときどき思い出しては、「食べてみたいなア」と、母の顔と重ね合わせて、昔のことを懐かしく思親閣を臼指しましたがそこでビックリ、ところどころに「まむしに注意」の立看板が立つていました。

一二二三年、千葉の漁師の子久遠寺を訪ねたいと思います。

『ぶらり寺の一人旅』室谷忠雄

条時頼に呈上しました。邪教を捨てて法華經に帰依しなさい、そうでなければ天変地異が起ります。末法の世になります。と説いたのです

時間に余裕があれば身延山の山頂から見える、ここから東方三ヶ四キロにある七面山の日蓮宗敬慎院まで、参拝日程を組んで廻られたらいかがでしょう。

稗(ヒエ)の神で、天に昇られたのは米穀の神であった。蝦夷は酷寒の地であるので、十二糖などをつけて食ますが、當時は何よりのご馳走でした。

母は仕事の忙しいのもいとわず、こうしたおやつを手際よく作ってくれたものでした。

また、節句の時のべこ餅は黒砂糖を入れてこねるので、特別の味わいがありました。ときどき思い出しては、「食べてみたいなア」と、母の顔と重ね合わせて、昔のことを懐かしく思親閣を臼指しましたがそこでビックリ、ところどころに「まむしに注意」の立看板が立つていました。

アイヌの人たちは夷狄(いてき)と言われることを恥思っている。日本に大いに好意を持っているので、教化するならば良民となれる今の時勢である。

吉平町岬短歌会九月詠草



吉平ホトトギス会

秋灯下話まとまり旅一と日 斎藤波留

新涼や羊見むとて遠出かな 山口悦子

空を被ふ神威岬の岩つばめ 越野敏雄

輪に入らず踊太鼓に落つかず 大和田絵伊

ちぢみたる身丈を伸ばす敬老日 福井幸平

生きれどよトンボ大川渡りゆき 関口勝志

流れ星糸引くよう分れたる よしざきり

縁台に腕枕に鰯雲 仲谷比呂吉

爽涼の暁光海を眩しめり 越野清治

ジヨギングの踏み出す一步秋の風 室谷弘子

淡く濃く海へと走る秋の雲 泉清三

は文化祭作品展示会が始まります。今年は服部昇司さんの

▽秋の彼岸を前に、千メートル以上

の山や高い峠では雪という

予報でした。積丹岳にも雪か

と思つていまつたが、古平か

らは見えませんでした。いよいよ冬はかけ足のようです。

▽たらつり節大会も盛況のうちに終わりましたが、月末に

少しづつ色付き初めし庭すみの紫式部は秋を運び来
意にそはぬ話の果てに別れきぬ夢のさめたる朝のさびしさ
暑き夏やうやく来しと思ひしに海に沿う道芒穂ゆるる
採りたてを食べさせむと海辺に遠く行き買ひ来しといふ雲丹
生きてゐる
自衛官の結婚披露宴をもり上ぐるラッパの音のなつかし淋し
花きびの枯穂の先にまたひとつ秋津遊びて黄昏ゆけり

堀 典 子

公園で花火を上ぐる児等もなく涼しき夏はあへく終りぬ

榎 佳 代

萩の花続く堤防に幼な孫「みなみ」と遊ぶ夫は笑顔で

山 口 ス エ

絵里ちゃんとのペットの兎珍客の我から離れず飼ひ主に似て

魚 屋 友 子

は文化祭作品展示会が始まります。今年は服部昇司さんの遺作からと、町史編さん室で所蔵している『すけそ漁』の写真展示のほか、大正から昭和にかけての『にしん漁』に関する写真五〇枚ほどを、パンフレットにして配布する予定です。にしん漁の写真がありましたらお貸しください。